

す。多くの私立小学校では、卒業生が併設の中学校に進んで、ほかの小学校から来る子どもたちと机を並べることになりま
す。中学校で初めて外国語を学ぶ子どもたちと比べれば、小
学校から外国語をやっている子の方が、上の学年になっても
高い英語の力を発揮することが当然期待されるのですが、実
は、必ずしもそうは言えないようなのです。ある学校の先生
は、「中3ぐらいになるとほとんどちがいが分からない」と
言っていました。

◆ 帰国生の場合は

小学校の英語が目に見える成果を上げることが難しいも
っとも大きな理由は、英語にふれる量が圧倒的に少ないから
だと考えられます。例えば、45分の授業を週に2回実施し
たとしても合わせて50分、それを年間30週行っただとしても
1500分で、六十数時間にしかなりません。3年生で英語を
始めたとして、6年生まで「4年間英語を勉強しました」と
言っても、授業時間に英語にふれる量は、英語で生活する国
に住んでいる場合の1か月分ぐらいになるかどうかという計
算になります。しかも、英語は日常の生活に必要なので
すから、授業から次の授業までの間に忘れることが多くて当
然です。

英語の世界に住み、生活の言語として英語を使っている子
どもたちの場合は、状況が全くちがいます。朝から晩まで英
語の刺激を受けて、コミュニケーションの力をつけていきま
す。そのかわり、日本語の方は苦しいということになります。
しかし、帰国した瞬間に、英語と日本語の立場は逆転します。
小学生の英語の「保持・伸長」については、無理な期待をし
ないよう注意しなければなりません。

啓明学園の高学年のように、英語で生活してきた子が学年
に二十人ぐらいいるというような例外的な環境にいる場合は
別として、普通は、中学生ぐらいになるまではあまりあせら
ず、英語への親しみと関心を保つことを心がけることが大切
だと思います。問題は、大学生になるころに、あるいは大人
になったときに、どれだけ英語を使いこなせるかと言うこと
で、6年生のときにどれだけできるかではないのですから。

外国語にふれる量が少ないというなら、学校生活で外国語
を使って、その量を増やしたらどうかという考えは、当然う
かんできます。その一つの形が「イメージ・プログラム」
です。

次回から、私がアメリカで携わっていた「日本語イメー
ジョン・プログラム」のお話をしてみたいと思います。

* * * * *



アメリカンスクールでの交流

編集長から一言

「問題は、大学生になるころに、あるいは大人
になったときに、どれだけ英語を使いこなせる
かと言うことで、6年生のときにどれだけでき
るかではないのですから。」

北米で子どもを育てておられるお父さんやお母さんは、この佐々先生
の言葉の意味をしっかりと考えてみてください。

さらに付け加えるなら、大人になった時にも、どんなレベルの英語を
身につけさせようと思って、子どもに英語を学ばせているのかを、振り
返ってください。例えば、海外旅行で困らない程度なのか、大学院で研
究者としてサバイブできるレベルか、英語の力で生計を立てていく方向
なのかです。その目標で、指導する仕方や内容が大きく異なります。大
人になっても十分通用するバイリンガルに子どもを育てたいならば、
親子共々、大変な努力が必要なのです。

2・3年後のようですが、次の指導要領改定の時には小学校の正式科
目として英語が導入される、という話を日本の教育関係者からよく聞く
ようになりました。その準備が進んでいるようにも見えます。

そこで、真剣に考えていただきたいのは、日本語と英語の関係です。
「第一言語である日本語の能力が低ければ、第二言語としての英語は
伸び悩む」というのは、海外子女・帰国子女の教育に関わってきた人達
共通の、経験に基づいた考え方です。

小学校での英語教育を否定するものではありませんが、学校としての目
標は何なのか、また、日本語学習とのバランスはどう取るかを、真剣に
考えるべきだと思います。

その理由は、私自身、海外で30年近く日本の子どもの教育に関わっ
てきて、その子ども達の日本語力、国語力の低下に驚いているからです。
皆さんのお子さんの、第一言語の力は十分ですか？